

探検の具体例①

より良い探検にしようと、ただ回数を増やしても、活動の質は高まりません。そればかりか、子どもは店内にあるものを見つけてくる活動に終始し、探検に対する思いや願いが徐々にしぼんでいってしまいます。

「探検ごとに関わる対象が広がる」「対象への関わり方が深まる」ことが重要です。ここでは、実践をもとに具体例を紹介していきます。

ここがポイント

共通体験の場をつくる

初めて探検に出かける際に、「良いものを見つけて来るんだよ。」と子どもに投げ掛けても、子どもにとっての「良いもの」は様々でしょう。

そこで、クラス全員で共通の場所で体験する方法がおすすめです。先生が、「お店の人に聞いてごらん。」「〇〇では、とっておきの話を聞けたね。」など、人と関わっている子どもの様子を価値付けたり、人と関わることの大切さを教えたりしましょう。みんなで共通体験し、人との関わりが生まれると、その後の探検も充実すること間違いなしです。

ここがポイント

探検名人3か条→探検博士3か条

探検名人の3か条

- ・【おすすめ】を見付けるべし
- ・【おすすめ】を発表すべし
- ・【おすすめ】に詳しくなるべし



探検博士の3か条

- ・一緒にやってみるべし
- ・人と仲良くすべし
- ・みんなに発表すべし

子どもの目は、比較的「もの」には行きやすく、「ひと」や「こと」へ目が向くには時間を要します。

そこで、探検名人3か条を提示し、「おすすめ」という言葉から、訪問先の特徴に目が向くようにします。「ただそこにあったもの」から「珍しいもの」「そこらしいもの」へと「もの」を見る力を養っていくのです。

そして次に、探検博士の3か条も提示し、「一緒にやる」「仲良くなる」ことを投げ掛けます。「もの」と十分関わった後に提示することで、子どもはスムーズに「ひと」や「こと」に関わり始めます。

あるある NG!

○計画性をもった単元作りを

→いきなり「あの、全員で伺いたいんですけど～」と言っても、受け入れ先の店や施設に人数制限があり、断られる場合がほとんどです。どのような単元にして進めるのか、子どものどんな力を高めたいのか、しっかりと計画を立てます。共通体験の場を設ける際には、予め見学先に確認をしておきましょう。

○人数制限があるため「行きたい場所に行けなかった」

→2学期に単元を進める場合には、1学期末に「子どもの行きたいお店調査」をしておくといいでしょう。長期休みを利用して見学先の訪問や交渉も可能です。また、おおよその人数を把握できていれば、詳しい条件を相手側と相談することができます。条件が良ければ、見学先などのバックヤードを見せてもらえることがあるかもしれません。

Active

○行きたい見学先に行けるように

生活科は子どもの思いや願いに沿った体験活動を大切にしています。

ですから、子どもの行きたい場所をできる限り行くことができるようにしてあげましょう。「1回行った場所はダメだよ!」「違う場所に行きましょう!」と教師が決めてしまつては、子どもにとって受け身の学習になり、「どうせ言っても、できないのでは……。」と感じてしまいます。

1回目の探検を終えて、子どもがもつ印象はそれぞれ違うと思います。「また2回目も同じ場所に行きたい。」「2回目は違う場所に行きたい。」と、それぞれの子どもの思いや願いに合わせ、探検の場をつくっていきましょう。大切なのは、一人一人の探検の目的が明らかになっていることです。活動が進むにつれて気付きの質を高まることを期待したいものです。